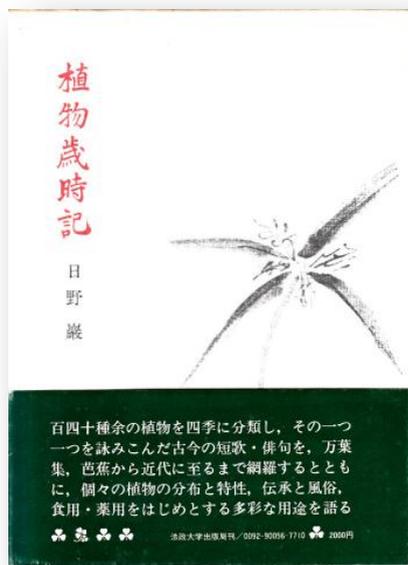


鹿沼の自然・栃木の旅

月報第14号

(2013年6月)



北光クラブ
自然観察クラブ

日野 巖著『植物歳時記』（1978年6月20日・法政大学出版社発行）

卯の花(うのはな)

かみまつる卯月になればうのはなのかきねもせみの衣きてけり 土御門内大臣
神まつるうつきの花のしろたへにゆふとりしてて山かつらせり 衣笠内大臣

神祭る卯月（旧4月）ともなれば、ウノハナの花盛りがなつかしくなる。ウノハナの名は卯月の花という意味であるともいうからウノハナは卯月の表徴であるかも知れない。

ウノハナはウツギともいい、5弁の小さい白花を枝端に群ってつけるので、遠く眺めると雪白でいかにも清純である。それで、古い昔から、あるいは雪にたとえ、あるいは月にたとえて愛賞したのである。

時わかずふれる雪かと見るまでに垣根もたわに咲けるうの花 読人不知
さらしなのさむき山べのうの花はきえぬ雪かとあやまたれつつ 兼盛
うの花を雪にまがへて飛火野の野もりやさらに若菜まつらむ 民部卿為家
をちこちの垣根にさける卯の花はたかせにかかる雪かとぞみる 藤原敦盛

(次ページへ続く)

☞ 目 次 ☜

表紙の本	日野 巖著『植物歳時記』より「卯の花」	2
活動報告・1	《特別企画》奥多摩・惣岳溪谷ハイキング	7
活動報告・2	初夏の古峰ヶ原高原散策～関東ふれあいの道に沿って～	14
次回案内	都会の森の自然観察会～明治神宮に武蔵野の面影を求めて～	19
山行報告	石裂山に行ってきました	21
会長寄稿	うのはなのはなし	22

付・唱歌「夏は来ぬ」歌詞

これもまたなぐさめかねつうの花の月かと見ゆるをばすての山 正三位季経卿

ひさかたのかつらのかはのうの花は月かあらぬかゆふくれの空 民部卿為家

ウノハナは、もともと山野に極めて普通な落葉低木であるが、庭にも植え、生垣にもしている。藤原敦盛の歌にも垣根のウノハナが歌ってあるから、随分遠い昔から栽えていたものと思われる。それで、卯月の名花として親しまれていたのも、ウノハナを詠った歌は頗る多かった。この頃では美しい西洋草花が庭園に植えられるようになったので、野趣のこもったウノハナは一向に顧みられなくなってしまったけれども、昔は季節感の豊かな花として愛賞されていたのである。試みに、未木和歌抄を見ると、ウノハナを詠った短歌は106首も載せてあり、いかに愛好されていたかがよくわかる。

ウノハナの白花は至って小さく、そう美しいものではない。それに、葉も至って硬いので、近くで見るとは親しめぬ人々も多いかと思う。ウノハナは遠くから眺むべき花であろう。清少納言の枕草子には

卯の花は品劣りて何となけれど咲く頃をかしう時鳥の蔭に隠るらむと思ふにいと
をかし、祭のかへさに紫の野のわたり近きあやしの家どもおどろなる垣根などに
いと白う咲きたるこそをかしけれ

と記してあるのを見ると、女性に好かれるような美麗さに欠けているのかも知れない。しかし、群り咲いた白花の一团を遠く眺めれば、「いとをかし」ということになるのかも知れない。

押しあうてまた卯の花の咲きこぼれ 子規

ウノハナにも歌の名所があった。山城国の賀茂川、音羽山、桂の里、宇治の里、小野の里、岩陰山、大和国の吉野川、初瀬川、摂津国の住吉の岸、陸奥の玉川の里、白川などがそれであった。これらの名所は昔から名高かったが、ウノハナは山地や原野には極めて普通な植物であって、珍しいものではない。どこでも見られるものである。岸辺のウノハナはよく歌に歌われたが、河岸の点景としてはふさわしいものであろう。

ひまもなくよる白波とみゆるかななつみのかはのきしのうの花 前参議親隆卿
はつせがはきしのうの花ちるときはさわがぬ水もなみぞたちける 平経正朝臣

かへるさのゆふべは北にふく風のなみたてそむるさしのうの花 前中納言定家卿
卯の花のさきにしひよりゆふだたみたなかみ川に浪ぞたちそふ、 藤原隆祐朝臣
ウノハナとホトトギスとは併せて歌に詠まれることが多い。このウノ
ハナは花季としてはやや晩い時期のものである。児童の歌う唱歌にも、
卯の花の匂う垣根に、時鳥早やも来鳴きて、忍び音もらす夏は来ぬ(※)
というのがある。これほどまでに有名であるが、古歌にも取入れられて
いて、古くは万葉集にそれがあり、

みな人のまちしうの花ちりぬとも鳴くほととぎすわれ忘れめや
五月やまうの花月夜ほととぎす聞けどもあかずまた鳴かぬかも
ふちなみは咲きて散りにきうの花は今ぞさかりとあしびきの山にも野にもほととぎす
鳴きしどよめばうちなびく
などと詠じてある。また、
ほととぎすしのぶの里にさとなれよまたうの花のさつきまつころ

前中納言定家卿

神山の身をうの花のほととぎすくやくしとねをのみぞなく 読人不知
ほととぎす待たるころはうの花のとなりさくもたよりなりけり 香川景樹
という歌も広く世に知られている。

ウノハナはまたシオミグサ、ハツミグサ、カキミグサ、ユキミグサ、
ミチモトメグサ、ナツユキグサ、ウツギなどともいう。カキミグサは生
垣に多く用いるからであり、ユキミグサ、ナツユキグサは白花の群って
着いているのを雪になぞらえたのである。ウツギは枝幹の内部が中空で
あるために、名づけられたのである。ウツギの名は今では普遍的な名称
になっているが、この名は和名抄に載っている古い名であるけれども、
古歌ではウノハナの方が一般的に用いられていて、ウツギの名はあまり
用いられなかった。しかし、

かつしかやかはそひうつぎ咲きしより浪より通うまのつきはし 鴨長明
ふし水やかはそひうつぎ花さきて浪はかきねのものとこそみれ 前参議親隆卿
いにしへやふるの垣根のうつぎ原花のをりみし人ぞこひしき 源仲正

※唱歌「夏は来ぬ」の歌詞全文を23ページに掲載しました。(次ページへ続く)

と詠ったものがあり、また、近世には、

わが門のわさ田うべき日を近みかきねのうつぎ花さきにけり 伴 蕎 溪

というのがある。近ごろはウノハナよりはウツギの名の方が広く歌に用いられている。

根の絶ゆる時なきものと植ゑられし林境のうつぎ花さく 窪田空穂

照りもり霽れてまた降るさみだれの草のとぼその野うつぎの花 太田水穂

垣根なるうつぎの花は扱き集めてぞろりと土に棄てられにけり 長塚節

天つ日の明るき谿にむれて咲くうつぎの花は幾叢も見ゆ 佐藤佐太郎

方言では、ウツギを土佐ではウツゲといい、薩摩ではハメキといい、近江ではヒキダラといい、北海道松前ではクネウツギといい、紀伊ではアナツポという。いずれも枝幹が中空なことにもとづくものかと思う。また、シロウノハナともいうが、これは白花という意味であろう。

漢名は和名抄に溲疏をウツギと訓んでいるが、これは誤用である。楊櫨、一名空疏としているものもあるが、其子為莢とあるから日本のウツギとは別種である。本草綱目啓蒙にはこの楊櫨をタニウツギにあてているが、これも誤用である。

ウノハナ(ウツギ)には種類が多い。その変種にシロバナヤエウツギ、サラサウツギ、マルバウツギなどがある。また、同属の別種にヒメウツギ、ウメウツギなどがある。ヒメウツギは河畔の岩隙に多く、やはり白花であり、それに花期もウノハナに同じであるから古歌に多い河畔のウノハナはこのヒメウツギをも詠っているかも知れない。ウメウツギは本邦の中部山地に生ずる稀品である。

ウノハナとは同科でユキノシタ科に属しているが別属のものにバイカウツギ、ノリウツギ、ガクウツギなどがあり、いずれもウツギの名を冠しているが、ノリウツギ、ガクウツギの花はウノハナよりは大きく、かつ花卉に見えるものは実は萼片であり、アジサイの仲間である。スイカヅラ科に属する植物にもウツギの名を冠するものがあり、タニウツギ、ヤブウツギ、ハコネウツギ、ニシキウツギ、ウコンウツギ、キバナウツギ、ビロウドウツギ、ツクバネウツギ、コツクバネウツギなどが挙

(次ページへ続く)

げられるが、ウノハナとは縁の遠いものである。また、フジウツギ科のフジウツギ、ドクウツギ科のドクウツギもウツギの名は冠しているがウノハナとは縁が遠い植物である。

ウノハナは花を愛賞するものであるが、その他の用途もある。5月ごろその新芽を茹でて食べることもあるが、葉が厚く硬いのであまりよいものではない。枝の青皮は、

其の鹿皮を去て青き皮、癬瘡の薬とす(大和本草)

青き皮癬瘡の薬に合す(本朝医談)

といい、薬用に供する。また、本草鏡には葉をもんでつけても奇効があると記してある。黄疸には枝や葉を煎じて飲むと効くともいわれている。ウノハナの果実は球形で色が黒く硬いが、これを君仙子と呼び、薬屋で売っている。糯に和して用いると咳の薬になるという。

材は中空ではあるが、木理がこまかく、堅いので、昔から木釘や小楊子や呑口や寄木細工などに用いている。

ウノハナの盛りもすぎると、いわゆる卯花腐(ウノハナクタシ)という雨の季となる。雨にぬれ雨に崩れゆくウノハナの風情は、花が華麗でないだけに、何となく淋しいものである。

卯の花を腐す霖雨の水はなに縁らむ児もかも 大伴家持



『原色植物大図鑑・3』(昭和31年4月25日・誠文堂新光社刊)より

ウツギとヒメウツギの明確な違いを図鑑の画像から読み取るのは困難だが、
ウツギ…樹高1.5~1.8m稀に3m、山野に自生、全体に毛
ヒメウツギ…1~1.2m、山地の谷浴いなどに自生、若枝・花序は無毛
などの違いがある。

《特別企画》奥多摩・惣岳溪谷ハイキング

5月4日（土） 天気・くもり

行程：JR 鹿沼 6:27—宇都宮 6:53—小山 7:24（ホリデー快速河口湖3号）—9:02 立川—青梅—奥多摩駅＝（バス）＝奥多摩湖（昼食）12:20……（「奥多摩むかしみち」をひたすら歩く）……奥多摩駅 16:58（ホリデー快速おくたま6号）—18:34 神田—上野（快速ラビット）19:20—宇都宮 21:00—21:13JR 鹿沼

みどころ：①奥多摩・惣岳（そうがく）溪谷沿いの新緑・草花などの自然

②旧街道沿いの集落のたたずまいと遺跡、鉄道（元東京都水道局小河内線）遺構？（線路、鉄橋、トンネルなど） ③その他

雨模様の中の高尾お花見山行からほぼひと月、新緑に旅心誘われ、特別企画の奥多摩新緑ハイキングに14名が集まりました。小学5年生の佐々木君が張り切って経路を調べてくれ、前回と同じ列車に「休日おでかけバス」（適用区間の自治医大まではもちろん往復乗車券を買いましたよ）利用で再び東京の山へ。連休最中のほぼ好天の日でしたが、往復の道中もまた現地でもさほど混雑に遭わず、早朝から夜まで丸1日の行程を、上は70代の老夫妻（ただし体育会系）から下は小学2年生の子まで全員元気に歩き通して無事帰ってきました。

朝は早くて少し大変でしたが、小山からは旧型の特急車両にゆったりと座って車窓の新緑を眺めながら1時間半ほどの鉄道旅行です。東京は事故遅延が多く予定は狂いがちでしたが、立川、青梅と電車を乗り継いで、やがて溪谷風景の中を終点奥多摩に到着。

「奥多摩むかしみち」歩きを楽しむ人の多くは、ここから奥多摩湖に向かって登って行きますが（登りの終点到湖水のご褒美となる）、我々は先にバスで奥多摩湖畔まで行き、小河内ダムを拝んでから奥多摩駅に向かって歩いて山を下る、現地ガイドによれば「楽」なコース。まずは、東京とは思えないような壮大な湖畔風景（貯水量は現在少なめで3分の2くらい）を眺めながら早めの昼食を広げます。近くには資料展示施設やレストランも。雲の多い空からかすかな雷鳴が聞こえ、天気がちょっと心配です。

奥多摩湖は戦前から戦後にかけて造られた東京都の水道専用ダムの貯水池で、湖底に沈んでいる旧小河内村は、明治期以前は西の山を越えて甲府盆地に通じる旧青梅街道

(甲州裏街道と言われた)をたどり、大菩薩峠を中継地として塩山と盛んに交易をしていたそうです。旧村民には湖畔に移住して残った人も多く、湖を囲む山の中腹高くに家が連なっている様子には驚きます。離れがたい山の幸の豊かさを想像させます。

奥多摩駅のある旧氷川村に向かって下る旧青梅街道が、これから歩こうとしている「奥多摩むかしみち」で、案内板も各所に配置され、整備されて安心して山里歩きが楽しめるようになっていきます。

結局雨は大した降りもなく、新緑三味のハイキングは、眼下の青緑色の渓流（惣岳渓谷）、鳥の声（オオルリも）、時おりフジの花の満開や、遅咲きのサクラなども堪能できました。

「むかしみち」には、「東京都水道局小河内線」の遺構がほぼ並行して残っています。かつて小河内ダムの建設資材を運ぶために数年間活躍し、その後計画としてあった観光鉄道への転用が実現せぬまま今日に至っており（だから廃線ではなく「休止中」なのだそう）、線路、鉄橋、トンネルが草や木立におおわれて見え隠れします。物好きな人々の訪問を時々受けているようですが、実際我々のメンバーの1人も、湖畔で別れて線路をたどって行き、トンネルを潜ったり、朽ちかけた枕木と線路だけの高所の橋を恐々渡ったりの大冒険行を敢行。我々も、深い渓谷や、車道（現青梅街道・国道411号）や、暗い木立の中に見え隠れする鉄道遺構とも交差しながらの山歩きを続けます。ごく一部ですが遺構の橋とトンネルも「体験」しました（ちょっと怖かった）。

むかしみち歩きの他にも方々の山歩きを楽しんできた人々で賑わう奥多摩駅に着いたのはもう夕方。神田、上野で乗り換え、上野では大勢の鉄道ファンに見送られながらの寝台特急「北斗星」のけたたましい発車風景を見た後、調達した駅弁で夕食をとりながら、鹿沼に向かいました。まだ連休は続くので、明日はゆっくりお休みなさ〜い、と言いたいところ。お疲れ様でした。（佐々木伸二君の報告文もご覧ください。）

※ 参加者(敬称略)

小川知峻・裕月・真司・恵美、佐々木伸二、
鈴木若菜、小島美穂、塩入宏行・佳子、
石崎隆史・裕子、阿部真大・良司・みゆき
(計14名)



奥多摩湖畔にて全員集合

※ 開花していた植物(草)

オオイヌノフグリ、オオジシバリ、カタバミ、カラスノエンドウ、キケマン、
キランソウ、クサイチゴ(写真)、クサノオウ、シャガ、ジュウニヒトエ、
セイヨウタンポポ、セリバヒエンソウ、タチツボスミレ、トウダイグサ、
ハルジオン、ヒメオドリコソウ、ヘビイチゴ

※ 開花していた植物(樹木)

クマイチゴ、ガクウツギ(写真)、ヒメウツギ、フジ、
ミツバウツギ、ヤブツバキ、ヤマツツジ、ヤマブキ



※ 見た(注目すべき)樹木

ムクノキ

クサイチゴ↑

ガクウツギ→

※ 出た鳥

オオルリ、カケス、ヤマガラ



※ 参加者からいただいたおたより

5月4日土曜日6時10分、JR鹿沼駅に集まった14人で東京都で一番高い山雲取山のある奥多摩町へ休日フリーきっぷを使って行った時の感想を書きました。

前日はとてもドキドキしていてなかなか寝つけませんでした。いざ当日。目覚ましは鳴るとはね起きてすぐ準備をしました。そして5時50分に家を出ました。

鹿沼駅に集まった14人で6時27分発日光線でいざ奥多摩へ。小山までは計画通り進みました。阿部真大君(阿部さんの息子さん)に誘われて先頭車両に行ってみました。大宮を出て武蔵野線の新座まで行こうと思いましたが、大宮でどっと客が乗ってきたので、席を取られては困る、とホームを走って戻りました。この列車は大宮を定刻通り発車。右の窓からは東北新幹線を走るE5系「やまびこ」が。そしてその後高架の向こうに見えたのは来年埼京線に入る予定の緑色の帯をまいた E233 系。とてつもなくレアな列車です。そんなこんなで武蔵野線へ。このころ京浜東北線が運転見合わせとなっていました。関係ないからいいか、と思っていました。ところが！ 西所沢あたりで流れてきた情報によれば新宿駅で起きた人身事故で中央線が遅れているとのこと。これは大変だと思っていたがほんとうに大変でした。「ホリデー快速」は武蔵野線と中央線との連絡線で2回停車。特に2回目は4～6分も停車していました。中央線はもう・・・結局立川には約7～10分遅れて到着。次に乗る「ホリデー快速おくたま5号」に目の前で発車されました。計画はここでおじゃん。けっきょく次発の

各駅停車青梅行きに乗っていったん青梅へ。列車は1駅1駅ていねいに停車。快速ならこんなびゅんびゅんとばしてしまうのに。

そのまま青梅へ。降りようとしたとたん足もとが広くてビックリ！ とにかくここからは空いて座れると思っていたら、ほとんどの人がホームの真ん中に集まってきました。まもなくやってきた4両編成。列車に人が集まり……ドアが開いたとたんみんな飛び乗りました。ぼくたちはドアに近いあたりでドアを開けっ放しにして換気しました。ほとんどの駅で換気。そんなことをしていたら御嶽で70%くらいの方が下りました。

バスには乗れないのでタクシーかと思っていたらなんと増発の奥多摩湖行きが。目的地奥多摩湖までこれで行くことに。

奥多摩湖はいつもより水位が低いらしく土がむき出しの地面が見えました。そのあと廃線を歩くはずが全く線路に行き当たりません。そろそろあきらめた時、橋の上から光が見えました。別コースで行っていた阿部真大君。そのコースが合っていたのです。そして自分たちもその約40分後に廃線に合流。阿部真大君はその10分後に同じ場所を通ったそうです。その時通った橋は渡してある板が腐っていてしかも2レールの上を綱渡りのように歩いて行きました。その先にトンネルがありました。そこをそれて坂を下り町に入りました。今度は願った時間にピッタリに駅に着きました。そして「ホリデー快速おくたまら号」で帰りました。拝島では一番撮りたかった連結シーンを見事に動画に収めました。そのまま神田まで行き、山手線に乗り換え車内からは今度東北線高崎線常磐線を東京まで延ばす時の東北縦貫線と工事をしている桁架設機がありました。上野へ着くとまずは列車の着く15番ホームへ。そこでは寝台特急「北斗星」を動画に収めました。その後大急ぎで駅弁を買いに。ぼくは前から食べたいと思っていた牛タン弁当を買いました。ひもを引くと温かくなると聞いたのでさっそく引いてみると…とてつもなく熱くなったので大あわてで箱に戻しました。これほど熱くなるとは思いませんでした。落ち着いてから食べ始めるともうすぐ大宮。ホリデー快速に乗れなかった阿部真大君とここで合流しました。宇都宮にも定刻どおり到着。日光線に乗り換え無事に帰り着きました。

今度は明治神宮に行くので楽しみにしています。

(小5・佐々木伸二)



←今回も鉄旅が楽しめた
ホリデー快速河口湖号

今回も見送るだけ
寝台特急「北斗星」→





ゴールデンウィークはやっぱりハイキングでしょ

塩入 佳子

連休といえども平日が挟まってしまい、中途半端な休みになった今年のゴールデンウィーク。5月ということで、休日には様々な行事が目白押し。遠くには行けないし、近くといえば日光が鬼怒川しか思い浮かばない。「やれやれ、今年も休めない、遊べないの、地味すぎる1週間か」とあきらめかけていた時に届いた「奥多摩、惣岳溪谷ハイキング」案内のハガキ。夫を誘うと「行こう！」と、即断即決。というか4月31日にハガキが届いて、申し込み締め切りが5月1日だから即断するしかない。携帯のショートメールで申し込み。阿部さんからは、折り返し、「持ち物は月報のバックナンバーを参考にご用意ください。」と指示があったものの、その月報は書類の山に埋もれたか、処分されたか、出てこない。ハイキングなんだから大体こんなもんか、という緩やかな（いい加減な）思考のもと、老体に響かないように、できるだけ荷物を軽くして出かけることに。

当日は、前日夜のかなり激しい雨も上がって、春らしいうららかなハイキング日和。JR鹿沼駅から宇都宮、小山、立川を経て、途中人身事故があったとかで予定よりやや遅れたが、東京都のはずれもはずれ「ここもホントに東京？」という都会の山奥、奥多摩着。奥多摩からは臨時に増発されたバスに乗り、奥多摩湖まで新緑の山々や溪谷を満喫しながらゆるゆると登って行った。

バスを降りて展望台に立つと、ダム湖である奥多摩湖の、完成までの道筋を年代と建設の工程に添って展示してあるが、わが鹿沼市の南摩ダムのことがどうしても頭をよぎってしまう。山肌へばりつくようにして何軒かの住宅が見られるが、ダム湖によって移転を余儀なくされた方たちの住居なのだろうか。

早めの昼食の後、早速、奥多摩駅を目指し、大人9名、子ども5名（高校生1名、小学生4名）けもの道に近い旧道をひたすら下って（初めのころは上りもあったが）、9kmから10km程度ハイキングした。当たり前だが舗装をしてない山道は、滑りそうで、転びそうで「年寄り転ぶな、風邪ひくな」とか、ぶつぶつ唱えながら皆さまに迷惑をかけないようにと一所懸命歩いた。植物に詳しい阿部ボランティアティーチャーが随時、樹木、草木について説明してくださり連なる山の名前もよくご存知だが、

私にはちんぷんかんぷんだ。いつも阿部ティーチャーと一緒にのせいか、子どもたちの方が植物についてとても良く知っているのには感心した。本当は、ハイキングでもっと余裕で自然観察しなければならないのに、無事に最後まで歩き続けられるかが心配でがつがつと歩くだけで格好悪かったな、と反省している。しかも私は、永年エアロビクス（有酸素）運動にかかわって来たため、ハイキングでも動的な休息（動きながら休む）になってしまい、途中から別行動になってしまったことをお詫びします。でも、完歩できて満足、満足。やっぱ、ゴールデンウィークは、ハイキングでしょ！

奥多摩自然観察会に参加して



天候に恵まれ、心配した妻の足の故障も大きく影響することもなく、参加者13名中の最高齢ペアになる我々2人でしたが、東京都とは思われないほど豊かな緑と自然に満ち溢れたくむかし道への散策を楽しむことができました。

帰りの交通手段が第3案まで詳しく調べ上げて記載してあることから分かる通り、会のリーダー・ガイド・世話役と1人で何役をもやすやすと、楽しみながらこなして下さった阿部さんと彼を支えるご家族の皆さんにはいくら感謝しても足りないと感じています。

すれ違う時にはグループが通り過ぎるまで、傍らによって待つほどの狭い山路を下りるときは、杖を携えてこなかったことを悔やんだこともありましたが、疲れを忘れさせてくれたのは、＜好奇心の塊＞のような阿部さんのご様子でした。子どもたちに負けないくらいのエネルギーを発揮して、草の中に分け入り、古い知己にでも会ったかのような雰囲気、草花や道端の木々について詳しく説明してくれました。改めてその道の造詣の深さに感服しています。

しかしながら、自分たちの体力では、度々立ち止まって説明を聞き、またその分、速度を速めてカバーしながら長い距離を歩き続けるのは無理そうだと判断し、途中から2人のペースで歩くことにしました。その結果、グループとは別行動になりご迷惑をおかけしてしまいました。年寄りのわがままをお許し頂き、次の機会にも又お声をかけてくださるようお願いして擱筆します。 （朝日町・塩入宏行）

※ 奥多摩の思い出写真集



湖畔での昼食



昼休みの点景



奥多摩の山道



高みに登って見下ろす
湖水風景→



←木の間に見える
惣岳渓谷の深緑の水



コンクリート橋の遺構↑

子どもは吊り橋が大好き！



鉄橋の遺構を背景に



トンネルも幾つもあった



新緑の古峰ヶ原高原散策～関東ふれあいの道に沿って～
5月26日（日） 天気・はれ

好天の下、鹿沼学舎との合同で、古峰ヶ原に新緑を訪ねる観察会を開催しました。小学生から70歳代まで、北光クラブの8名に学舎からの参加者が加わって総勢24名になりました。車数台に分乗して出発。沿道は新緑たけなわ、木々の白い花に、高い所まで這い上ったフジの紫色が目立つ初夏の風景です。

散策に出発する前に、鹿沼学舎の豊田顧問から、今や世界遺産となった日光の原点が、開山した勝道上人の修行場所であった古峰ヶ原、中でも深山巴の宿にあるのだとの説明がありました。その苔むした湿地のような深山巴の宿から出発して、植物や野鳥を観察しながら関東ふれあいの道に沿って進み、背後に三枚石のそびえる、気持ち良く開けた古峰ヶ原湿原（ズミの白、ミツバツツジのピンクが満開できれい）を経て、古峰ヶ原峠に到着。あずまやで昼食の店開きとなりました。

昼休みの後、かすかな雷鳴も聞こえる雲行きを案じながら、さらに関東ふれあいの道に沿って、登山道や、所々旧車道を通して下って行きます。道の途中に巨大な花崗岩の塊、へつり地蔵を見上げて通ります。

関東ふれあいの道入口駐車場で車に乗り、古峰神社大駐車場の広々とした空間でトイレ休憩して、反省会をし、ここで解散となりました。雨が本格的に降り出すこともなく、無事行程を終えました。



※ 参加者（敬称略）

鈴木若菜、平井亜湖、小島美穂、山口龍治、石崎隆史・裕子、阿部良司・みゆき
（以上北光クラブ8名）

市村悦夫、祝 純子、高山公男・良恵、川津 聡・尚美・嘉威・智歳、
駒場道子、坪子広子、野中文江、渡邊友子、大森俊雄・俊一郎・亮二郎、
豊田敏盟（以上鹿沼学舎16名）

※ 見られた花(見た順)

フジ、ミズキ、ニセアカシア、ズミ、
ミヤマザクラ、アオダモ、ヤマツツジ、ツリバナ、
メギ、トウゴクミツバツツジ、ウマノアシガタ、
テキリスゲ、ミツバツチグリ、トキワハゼ、
ツボスミレ、セイヨウタンポポ、スミレ、
キバナウツギ、マムシグサ、クマイチゴ、
ミツバウツギ、タチツボスミレ、
ヒメウツギ、クワガタソウ、コンロンソウ



ズミの花↑

↓トウゴクミツバツツジ



※ 鳴いていた鳥

ホトトギス、センダイムシクイ、アオジ、
ウグイス、シジュウカラ、ヒガラ

※ 見られた昆虫

エゾハルゼミ(鳴き声)、マツズズメ、
ヒサゴズズメ、タケカレハ(幼虫・右写真→)、
モンキツノカメムシ、キクビアオハムシ、
クロアゲハ、ヤマキマダラヒカゲ



※ 見られたキノコ

マツオウジ、クサウラベニタケ

※ 参加者からいただいたおたより

春の自然観察会(前回4/16)

滝があると聞いたことはあります。見て、とてもよかったです。

ガイドもつき、心強く、楽しめました。

みんなで食べた食事は、おいしかったです。

初夏の古峰ヶ原高原散策

ニシキウツギ、キハダが印象に残りました。

ビンズイは、はじめて見ました。きれいでした。

山歩きは、団体で行ってよかったです。



(鹿沼学舎・市村悦夫)

今回初めて参加させて頂きました。

古峰ヶ原高原散策と言っても奥が深く、それぞれの分野において知識の豊富な方がいらして、大変勉強になりました。

ただ、一度聞いただけでは忘れてしまう事が多く、何度も参加させて頂き、その度に1つでも多くの事を知れたら良いなと思いました。

天候も良く、あちらこちらに花も咲き綻び、とても楽しい時間を過ごす事が出来ました。

p. s. 雷が鳴り、ちょっと焦りましたが、皆さん意外に平気そうでしたね。これもまた驚きでした。(鹿沼学舎・祝 純子)

新緑の香りを肌で感じ、野鳥の声を聞き、道端に咲く可憐な草花や溪谷沿いの植物に目を奪われ、自然のすばらしさを感じました。(野中文江)

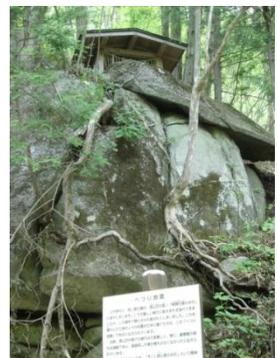
※ 古峰ヶ原思い出写真館



深山巴の宿の入口



巴形に蛇行する清流



苦行の悲劇を伝える
「八つり地蔵」

古峰ヶ原湿原のパノラマ
(焦点距離の関係で
ちょっとヘンに
見えるかも)



山口さんの自然講座

古峰ヶ原で見たものについて

5月26日、鹿沼学舎と合同で古峰ヶ原・関東ふれあいの道の自然観察会が行われた。3週間前とはずいぶん違い、トウゴクミツバツツジ、ヤマツツジ、シロヤシオ（ゴヨウツツジ）、ハウチワカエデ、ズミ、カマツカ、メギ、ツリバナ、キバナウツギ、ウグイスカグラ、スマレ、ツボスマレ、ミツバツチグリの花が見頃で、フデリンドウ、オオカメノキの花は終わっていた。まだ咲いていなかったカツラの花も遅く、ミヤマザクラが咲きはじめていた。何の花が見たいかは、月報13号も参考にして、すでに花が終わっているものは来年チャレンジしてみしてほしい。

古峰ヶ原湿原の道端にタヌキが死んでいた。今回はタヌキなど、あまり知られていないことや、タヌキと同じ性格を持つ動物についてふれてみよう。

昔から狸汁は旨いという。けれど、タヌキの肉は臭くて煮ても焼いても食べられるものではない。山村に住む人たちは、臭いタヌキと旨いタヌキがあるという。旨いタヌキとはアナグマのことで、よく似ているのでタヌキだと思っているようだ。タヌキはイヌ科だが、小さいときから飼っても人になつきにくい。これはアライグマも同じで、かつてテレビアニメ「あらいぐまラスカル」がはやりアライグマを買い求めた人が多くいた。子供のうちは可愛くていいが、成獣になると手に負えなくなる。ハクビシンもそうで、エサをやるうと近づいただけで威嚇し、へたをすると噛み付かれて大ケガをする。それで野外へ放す人がいる。畑の作物の害獣でもあり、日本にはいない動物だから絶対に放してはいけない。かわいいとか興味だけでなく、習性をよく理解したうえで飼うべきである。

おとなしいハムスターは、さわられるし子供のいる家庭向きの動物で、気質の荒い動物を飼うことは、おすすめできない。

(山口龍治)



※ 古峰ヶ原植物図鑑



←フデリンドウ



ズミ→



←コンロンソウ



マユミの花→



←クワガタソウ



キバナウツギ→



←モミジガサ (葉)



ヤグルマソウ (葉) →



フサザクラの葉



カツラの葉

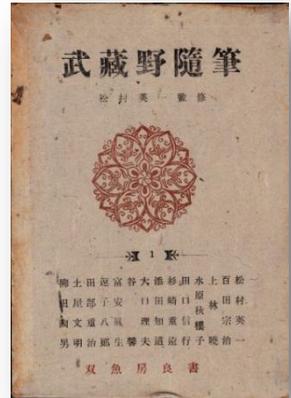


オヒョウの葉

すでに終わりました
報告は次号…

都会の森の自然観察会
～明治神宮に武蔵野の面影を求めて～

…この意味から、例えば東京を中心とした場合、
そう大して遠出をせず、都心より乗車1時間乃至2
時間位の半径を以て包摂せらるる所の所謂武蔵
野に、自然の幽趣を探るなど、此上なき身心の充
養といわねばならない。しずかに武蔵野の林間を
歩み、ふかく自然の声に耳を傾け、そこに伝えらる
歴史と民俗とを探り、清澄な眼と謙虚なる心と、そ
して滲み出るような真実の勇氣とを養うことは現世
の至幸というべきである。



凡そ山野に心を寄せるものは、微かな自然の心
を鋭く聴き分ける力をふかく貯えなくてはならぬ。自然の声は、仮令低い山にでも、
之を聴くことができる。平野のなかの杜のなかの苔の上にも之を捉えることができる。
赤松の寂かな林をわたる風の音にも、その幹の微かな揺れにも、之を感ずること
ができる。武蔵野のところどころに、今でも残っているささやかな沼や池。それらの
水面も、流れてゆく白い雲の影を映せば、遠い信濃飛騨国境山脈の山腹に千
古の雪をとかして成った山湖沼の心とが相通うのである。(後略)

河野八郎筆『山野逍遥について』(昭和17年11月20日、文林堂双魚房発行
『武蔵野隨筆』(松村英一監修)所収)より

初詣の人出などで知られ、最先端の繁華街・原宿にも隣接した明治神宮は、都会のど
真ん中に残された自然のオアシスという印象がありますが、実は大正時代に明治天皇を
神として祀る神社が造営されるまではほとんどが畑で、「永遠の森」を造ろうとした当
時の林学・農学・造園の学者・技術者の叡智の結集による人工の森なのだそうです。当
時の宰相・大隈重信はその構想の常緑広葉樹林を「藪にするな」と反対し、伊勢や日光
のように荘厳な杉林を主張しましたが、彼らの構想とおりの森が、結果として、100

年近く経った私たちの時代に安らぎの場を提供しているのは、尊敬に値することではありませんか。その先人の足跡をしのびつつ、武蔵野の名残が色濃く残る都会の森に季節を楽しみに出かけませんか。意外と深い自然観察ができるかもしれません。

日 時：6月9日（日）AM6：45 東武新鹿沼駅集合

行 程(案)：東武新鹿沼 7:22——(東武日光線)——北千住・浅草——(地下鉄千代田線・銀座線)——明治神宮前・表参道……明治神宮(参拝、境内散策、自然観察、昼食)……都内の緑地・名所を探訪しながら JR 東京駅へ向かう——(経路未定)——東武新鹿沼

服 装：歩きやすい靴、帽子

持ち物：リュックサック、水筒(ポット)、レジャーシート、雨具、弁当(昼食は神宮内のレストラン・売店でも調達可能)、おやつ、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋

あると便利な物

費 用：往復

協力金500

申し込み・問合せ

チャレンジ

、石崎まで。

問合せ：自然観察クラブ 阿部(電話 090-1884-3774)

石崎 電話 090-1464-6899

お知らせが遅くてすみません。
すでに終わりました。
報告は次号をお楽しみに…

入苑料(維持

☞ その次の予告 ☜

7月14日(日) 日光・太郎山(標高2357m)登山

自然観察クラブ初の2,000m級の高山への挑戦です!

詳細は次号にてご案内します。お楽しみに。

石裂山に行ってきました

石裂山の春の植物

連休最後の5月6日、阿部隊長と石裂山の植物を見に行った。登り始めてフタバアオイが多く見られ、花をつけていた。このほか、谷浴いの登山道の傍らにはツルネコノメソウ、カテンソウ、ムラサキケマン、チャルメルソウ、ヒトツバテンナンショウ、ヤマリソウ、ジロボウエンゴサク、ミヤマハコベ、ハルトラノオ、ヒイラギソウ、エイザンスミレ、チゴユリ、ミヤマキケマン、クワガタソウ、ニシキゴロモの花が咲いていた。樹木ではマルバアオダモ、クロモジ、コクサギ、ヤマツツジ、ヤマシバカエデ、オトコヨウゾメが見られた。アカヤシオ、トウゴクミツバツツジの花は終わりごろ。ミヤマガマズミ、ミツバウツギ、ヤブデマリ、ハナイカダは蕾であった。サワグルミの他、ブナ科・カバノキ科の花は終わっていた。

今回はフタバアオイ(双葉葵)を紹介しよう。

春の自然観察ハイキング(黒川浴い)で見られたウスバサイシンと同じウマノスズクサ科のカンアオイの仲間である。水戸御三家の紋章・三葉葵は、フタバアオイの葉3枚を図案化したもので、ゆかりのある京都・上賀茂神社の葵祭り(5月15日)には欠かせない。別名カモアオイは賀茂神社に因む。1つの株から2枚の葉が出るのでフタバアオイの名が付けられた。分布は福島県以南・四国・九州で、山の木陰に生える多年草。

(山口龍治)



落石防止のために張られたネットが、人生経験の浅いカモシカの子にとっては、わなになってしまうことがあります。人口構築物ほど怖いものはありませんね。

5月6日、加蘇山神社手前の車道沿いで。

すでに警察官が出動していたので保護されたはずです。

(阿部良司)

うのはなのはなし

5月下旬になると我家のまわりに訪れる野鳥の観察が楽しみだ。観察、といっても昼間姿を現わすのはスズメ、キジバト、ヒヨドリ、ハシブトガラスぐらいなものだ。楽しみ、というのは姿がわからない夜鳴き鳥。ポッポー、ポッポー、と鳴き続けるアオバズク、ああそういえばあお葉が茂る頃に鳴くからアオバズクか？ そしてトッキョ、キョキョキョキョ、と鳴くホトトギス。戸張町にいる時は夜中にトイレに行った時、窓の外から、ヒー、ヒー、ヒー、チリリン、というヌエ（トラツグミ）も聞いたことがある。上田町の我家の寝室は2階で、誰もクーラーが欲しいとは言わないので窓は開けっ放しだ。ここに移り住んでから、毎年一度くらいは、この季節の明け方、アカハラのキョロン、キョロン、チリリン、というさえずりを聞くことができる。一度だけだが、クロツグミがしばらくさえずっていた時は涙が出るほど感動した。

梅雨入り間近のこの季節、テレビやラジオでは「梅雨の季節に似合うのはアジサイですね」などというアナウンサーの話をよく聞くけれど、時には「ウノハナ」すなわちウツギを出してほしいものだ。何々ウツギという植物がいろいろな科にあるが、アジサイと同じユキノシタ科でウツギに最も近いものにヒメウツギがある。サクラの仲間では里山でヤマザクラやカスミザクラが咲き、次に高原でミヤマザクラ、オオヤマザクラ（エゾヤマザクラ）、チョウジザクラが咲き、最後に高山でミネザクラ（タカネザクラ）、チシマザクラと咲き登って行くが、ウツギは5月上旬に古峰ヶ原や日光山内、奥多摩など高原の沢沿いでヒメウツギが先に咲き、5月下旬になって、里でウツギが咲き始める。ウツギはいわば私たちの身近にある植物なのだが、ヒメウツギは見たことがあるけれどウツギは見たことがない、という人が案外多いかもしれない。かくいう僕もヒメウツギは20年も前、植物のことなど何も知らない時代に日光の

(次ページへ続く)

赤沢で初めて見て、写真を撮って人に教えてもらった。5月中旬にはいろは坂がこの白い花で飾られることもわかった。多くの方は新緑の季節に高原や溪谷に出掛けてこの花に出会うはずである。

これに対してウツギは5月下旬、田植えが終わって露入り間近の頃、里山の藪の田んぼのへり等で見る人が多い。山里に住む人にとってはごく普通の身近な植物なのだが、田んぼや里山に行かない私たちにとっては今や縁遠い植物になってしまったかもしれない。

僕がウツギを初めて見たのは茂呂山だったけれど、その後日光奈良部の黒川の河原にもあることがわかった。6月2日、山口さんと岩山西麓に植物観察に行った。その棚田のまわりの藪にもウツギがあったし、そこまで行かなくても、新鹿沼駅から酒野谷に抜ける車道沿いの田んぼのへりで咲くウツギの白い花はよく目立っていた。

本格的な梅雨に入る頃、花は終わってしまう。

(阿部良司)

夏は来ぬ (佐々木信綱作詞・小山作之助作曲)

う はな にお かきね
1 卯の花の 匂う垣根に
ほととぎす は き な
時鳥 早やも来鳴きて
しの ね なつ き
忍び音もらす 夏は来ぬ

おうち かわべ しゆく
4 棟散る 川辺の宿の
かどとお くいなこえ
門遠く 水鶏声して
ゆうづきすす なつ き
夕月涼しき 夏は来ぬ

さみだれ やまだ
2 五月雨の そそぐ山田に
さおとめ もすそ
早乙女が 裳裾ぬらして
たまなえ う なつ き
玉苗植うる 夏は来ぬ

さつきやみ ほたる
5 五月闇 蛍とびかい
くいな な う はな
水鶏鳴き 卯の花さきて
さなえ う なつ き
早苗植えわたす 夏は来ぬ

たちばな のき
3 橘の かおる軒ばの
まどちか ほたると
窓近く 蛍飛びかい
おこたり いさむ なつ き
おこたり諫むる 夏は来ぬ



会報の購読について

会報はインターネットでご覧になれます。

また印刷したものはクリーニングハウスあべ店頭に置いてあります。(無料)

確実な入手をご希望の方は、年会費(1,200円)をお納めいただければ、

ご自宅まで郵送いたします。



鹿沼の自然・栃木の旅 月報第14号

2013年6月1日発行

北光・自然観察クラブ

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

年会費 1200円

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ



検索